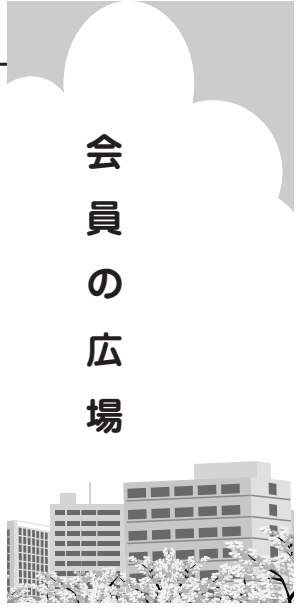
会員の広場



隔世と格差を感じて―ロス探訪記

濵田　義文（東京）

ロスアンゼルスの一画にあるリトルトウキョウ。ここに、大谷翔平の巨大な壁画が十階建てのホテルの側面を彩っている。その前でスマホをかざすと、ドジャーズのユニフォームを着た大谷がバットを振り、白球を投げ込む。AR技術が躍動する姿を映し出す。行き交う人々の目を引きつける新名所になった。

通りを渡ると全米日系人博物館がある。明治元年に始まる日系移民の歴史が展示されている。初期の移民は奴隷同様の扱いを受け、二〇世紀に入ると「帰化不能外国人」として排斥された。第二次世界大戦が始まると、わずかな持ち物をトランクに詰め込んだだけで、強制収容所に送り込まれた。その過酷な生活は、積み上げられたトランクや収容所のバラック小屋を移築した展示から伺える。一方で、日系人部隊が編成され、ヨーロッパ戦線に送り込まれ、多大な犠牲を払いながらも数々の武勲を挙げた。戦後、公民権運動と共に差別に抗い、一九八〇年代に至り、政府から強制収容に対する謝罪を勝ち取り、「日系アメリカ人補償法」を成立させた。日系人に囲まれたレーガン大統領が法案に署名する写真が、大きく飾られている。

今日ではアスリート、アーティスト、ノーベル賞受賞者や実業家など多くの日本人や日系アメリカ人が、活躍の場を広げている。「移民」は「アメリカン・ドリーム」と悲喜交々撚り合わされて、現在につながるこの国の歴史を紡ぎ続けている。

リトルトウキョウを抜けると、スキッド・ロウというエリアに入る。空気が一変し、異臭が漂い、街並みは荒んでいる。落書きが多く、テントが歩道にびっしりと並び、ゴミが散乱している。ホームレスが、上半身裸でふらつき、路上に寝そべっている姿も目にする。最も治安の悪い地区が、道路をたった一つ隔てただけで接していることに驚かされる。

フリーウエイを少し走ると、海風が心地よいプラヤ・ビスタというエリアに着く。かつてハワード・ヒューズの航空会社があった広大な敷地が、再開発され、住宅と商業が複合したコミュニティに変貌している。緑の芝生とパームツリーの街並みは、ゴミひとつなく、ペットを連れて散歩する人や公園で子どもを遊ばせている人の姿が見られる。昔の航空機格納庫がグーグルのオフィスに転用され、マイクロソフト、YouTubeなど大手IT企業も進出し、今では「シリコン・ビーチ」と呼ばれ、憧れのエリアに生れ変わっている。

カリフォルニアの蒼い空の下で、時間と空間をまたいだ「光と闇」を肌で感じた。